



東京八王子プロバスクラブ

創立 1995 年 10 月 18 日

2015～16年度テーマ

プロバスだより

第245号

<http://www.tokyo-hachioji-probusclub.jp>

2016年4月14日発行

編集・発行：情報委員会

仲間の輪を広げ、楽しみの環を広げよう

第 245 回例会

日 時：平成 28 年 3 月 10 日(木) 11:30～13:30

場 所：八王子エルシィ

出席者：58 名 欠席者 11 名 出席率 86.6%
(会員総数 69 名 休会 2 名)

会食とハッピーコイン披露

荻島例会委員長の合図で会食を始め、会食中に岩島副会長より 14 名のハッピーコインが披露された。(4～5 ページに掲載)

開会 例会委員長の司会で開会、資料の確認

1. 挨拶

永井会長



このところ寒暖の差が激しく風邪をひかれる方が増えています。皆さんどうぞ十分に体調管理を心掛けてください。

今月は 3 月 10 日の東京大空襲、3 月 11 日の東日本大震災と大変なことが起きた忘れがたい月です。5 年前の 3 月 11 日はサロンの開催日にあたり苦慮したことを思い出します。

さて今日はサロン第 1 週が始まります。話し手の皆さん、担当の皆さんにはご苦勞をおかけしますがどうぞよろしくお願い致します。

昨年運営の中で気が付いたことですが、受付が混雑して参加者の方々をお待たせしているようなので、今年は皆さんの協力で流れがスムーズになるように十分ご配慮ください。

うれしいことに今月も新しい会員をお迎えします。お蔭様で会員数 69 名、念願の 70 名にあと一息です。活力あるプロバス活動のためにみなさんの一層のご協力をお願いします。

新入会員の紹介

竹元正美さんが入会されました。立川会員のご紹介です。

竹元さんのご挨拶

1945 年長野県生まれです。日立製作所の研究部門を経て、1970 年に外務省へ移りました。宮内庁東宮侍従、ホンジュラス・ウルグアイの各大使など外交官として 41 年間に勤め退職しました。



現在は自然豊かなみなみ野七国に住んでいます。趣味はゴルフ、囲碁、園芸、フルート演奏等です。

プロバスクラブにお誘いいただき、その設立趣旨と奉仕精神に共感して入会しました。これから皆さんと一緒に地域奉仕活動に努めたいと思います。

ご挨拶のあと、会長から会員バッジとウェルカムカードが贈呈されました。先月入会の一瀬さんにもウェルカムカードが渡されました。

2. パースデーカード贈呈



永井会長から 7 名の会員に池田会員手作りのパースデーカードが贈られました。

写真左から、根本照代、土井俊雄、田中信昭、荻島靖久、阿部治子、竹元正美、永井会長の皆さん。(大串延子さんはお休み)

3. 卓話 ランを楽しむ

橋本鋼二



サロンが始まり、皆さんいろいろと難しい話にふれたり、あるいは準備で忙しかったりではないかと思

います。そこで卓話は、ランの花のスライドを見ながら、少しのんびりしていただこうかと考えました。**蘭の美しさを初めて認識したのは、タイに赴任した70年代**

一般家庭でも蘭をバスケットや鉢に植えて軒先につるしていたり、庭の木に着生させていたりして楽しんでいるようでした。また、ランの展覧会では豪華なバンダ属のランが咲いているのを見る機会があり、美しいと思いましたが、あくまで、南国の花としての認識でした。また、マーケットでは野生のランを廉価で販売しているのを見ましたが、私自身がランを育てたりするという事は全く考えていませんでした。

空き家に数鉢のランが

1985、86年と親が亡くなり、八王子の空き家には数鉢のランが残っていました。枯らしてしまうのも可哀想という思いがして、当時つくばに住んでいた家に持ち帰ったのが自分でランを栽培することになった始まりです。思い返すと日本原産で香りのよいフウラン、寒さに強く花持ちがいいシンビジュームとデンドロビュームでした。今でもその時のフウランとデンドロビュームの「サギムスメ」が毎年花を咲かせます。

1988年に家族は八王子に移りましたが、私は転勤族で、女房がもっぱら面倒を見ていました。真冬に咲くランにだんだん惹かれて自分でもシンビジュームなど幾鉢か購入してみました。

最初は知識が乏しく失敗

ランの花は魅力的ですが、当時ランの値段は今より押し並べてかなり高く、庶民的とは言えませんでした。最初は、基礎知識もなく、失敗しながら、ランの育て方は種類によって違うことを知りました。

咲く時期も花も様々なランの魅力に惹かれ、育て

方が少し難しい場合もあるので、かえって本を買ったり、詳しい人から学んだりするようになり、次第にランのとりこになりました。

90年代になって、女房と神代植物公園を根城にした神代洋ラン友の会のメンバーになりました。そこでランの育て方をいろいろ教わったり、株を分けてもらったり、ランの生産・輸入専門業者からも購入したりして、次第に数を増やしていきました。3畳ほ



どのミニ温室を作ったのは90年代半ばで、やがて2棟6畳ほどとなり、ランの鉢で埋まるようになりまし

た。(写真は spider orchid と呼ばれるブラシア属の花)

90年代半ばからは外国へ出かけてもランが気になるようになりました。いろいろな国でランを入手しては栽培を試みました。タイ、インドネシア(スマトラ、カリマンタン)、ベトナム、アルゼンチン、パラグアイ産のものなどです。また、オーストラリア産の野生種を輸入したこともありましたが、残念ながら、私の技術では、ほとんど失敗してしまいました。

データベース化した記録を眺めてみると、二百種



位は枯らしてしまっています。ランは特殊な条件下で生育するものが多く、原種は、それぞれの原生しているところの環境に適合し、特化しているので、それと大きく異なる環境では、順調に生育しない場合がしばしばみられます。

家風に合ったランだけが残った

結局、家風に合った、つまりわが家でよく育つ丈なランだけが残り、現在に至っています。長いものは三十年以上子孫をつないでいるものもあります。唯一自己満足しているのは、ここ十年あまり一年中ランの花を切らすことがないことです。冬咲きから、春、夏、秋咲きといろいろな種類のランが交代で咲いてくれます。咲いたら居間の出窓の所に鉢を持ち込み楽しんでます。

ランを楽しむ

ランを楽しむのは、植え育て、花を咲かせる他に、多様な花々を観る楽しみもあります。観る楽しみと



しては、皆さんの身近な例として毎年2月中旬に東京ドームで開かれる世界ラン展(写真)

がありますが、それ以外にも春・秋にいろいろなところで展示会が催されます。

また5月中下旬なら、高尾山の杉に着生したセッコク(デン

ドロビウム属)の花(写真)を見ながらの登山もおすすめです。熱心な人は国内外でランが原生しているところを見に出かけたりします。



ランはたくさんの種類があります。カトレヤ・パフィオペディラム・デンドロビウム・シンビジュームの4属や胡蝶蘭の名前をよく耳にします。花屋の店頭では、シンビジューム、デンドロビウム、オンシジューム、エピデンドラム、セロジネなどいずれも分類上の属名で呼ばれるランが並びます。これらは比較的寒さに強いランで、冬、家の中でランを眺める暮らしも可能です。

本日は、私が咲かせたいいろいろなランの花の写真

や、タイで撮ったラン、そして、今年の世界ラン展の様子などをご覧に入れました。

4. 幹事報告

田中幹事

① 美しいランのお話をありがとうございました。みごとに写真の技量と、むづかしい学名をたくさんご存知のその記憶力に感服しました。

② 岡田会員が事務局を退任されるので、新しい事務局と住所を決めなければなりません。事務局の在り方も含めてよいお知恵がありましたらお知らせください。皆さんの提案をお待ちしています。

③ 今日は何の日 会長挨拶にもありましたように1945年3月10日に東京大空襲がありました。

344機のB29による絨毯爆撃で死者10万人、焼失家屋27万戸という未曾有の被害を受けました。この惨禍を忘れないため、1990年に3月10日を「東京都平和の日」と定めて、毎年慰霊祭を行っています。

④ 今日の誕生花は「榆の木」 花言葉は「高貴」

5. 委員会報告

(1) 例会委員会

荻島委員長

出席会員数の報告(前記のとおり)

(2) 情報委員会

土井委員長

皆様のお手元にプロバスだより244号をお届けしました。武田さんのタブレットのお勧め卓話や、寺田さんの胃カメラの開発秘話の投稿など豊富な内容をお届けできたと自負しております。引き続き会員の皆さんからの投稿をお待ちしています。

サロンの話し手の皆さんには抄録のまとめをお願いします。

(3) 会員委員会

馬場委員長

今日めでたく新入会員をお迎えして、現在会員数69名ですが、休会が2名おられますので実数67名です。70名を目指して努力したいと思います。

先月に引き続き新会員の推薦について皆様のご協力をお願いします。

(4) 地域奉仕委員会

山口委員長

一般参加者93名になりました。新規の方22名、リピーターの方71名です。繰り返しお声掛けしていただいた会員の皆さんに感謝します。先日の開講式の出席者は来賓を含め121名で、一般の方62名、プロバス会員は51名でした。

お蔭様で新規参加者数は毎年ほぼ維持していますが高齢化の影響でリピーターの方が減っています。サロン運営の今後の課題と思います。

今日は第1週のサロンです。話し手の皆さんどうぞよろしく願います。

(5) 八王子「宇宙の学校」 下山リーダー

平成27年度「宇宙の学校」レポートができました。後援会の皆さんのおかげでとてもよい仕上がりになりました。御礼申し上げます。次年度の計画はただいま立案進行中なので4月例会にご案内致します。

3月12日、労政会館で八王子市民活動協議会が主催する「お父さんお帰りなさいパーティ」で、宇宙の学校行事のポスターや工作サンプルを展示、チラシを配ってボランティア希望者に参加を呼びかける予定です。

(6) 交流担当 浅川理事

3月6日、埼玉浮き城プロバスクラブの創立5周年祝賀会があり、日野、多摩、八王子各クラブから代表が参加しました。

6. 同好会活動

ゴルフ 小林会員

多摩、日野、八王子のプロバス3クラブは例年春と秋に合同コンペをしています。幹事持ち回りでこの春は八王子の担当です。今回は5月20日(金)相武カントリーを予定しています。

親睦と交流を図るよい機会なので大勢の皆さんのご参加をお願いします。

4月例会までにお申し込みください。

囲碁 下山会員

5月6日(金)台町市民センターで恒例の囲碁大会を開催します。

カラオケ 杉山会員

関係者のボックスにお知らせを入れてあります。

7. その他 例会委員会

次回サロンは、3月24日(木)です。サロン参加費1,000円と野外サロン経費6,500円を徴収しますのでご用意ください。

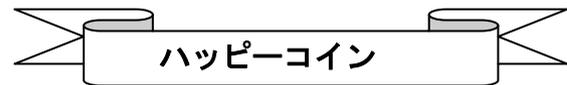
8. プロバス賛歌斉唱

9. 閉会

岩島副会長

アフリカの古いたとえに「老人がひとり亡くなる」と図書館がひとつ減る」というものがあります。知識と経験を蓄えた我々プロビアンはいわば大図書館のような存在であると誇りを持ち、日常の活動やプロバスサロンに臨みましょう。

では第1週のサロンのご準備をどうぞよろしくお願い致します。



◆竹元様をご紹介出来ますことを大変うれしく思います。皆様と少しでも早く仲良くなられ、クラブ活動にご活躍されることを祈念致します。

立川富美代

◆竹元正美様の入会を歓迎します。当クラブ会員の経歴の巾が更に拡大されました。よい化学反応を期待しています。

馬場 征彦

◆今月も新しい仲間を迎えることができました。

永井 昌平

◆今月も新入会員竹元正美氏をお迎えすることができました。皆様どうぞよろしく願います。

田中 信昭

◆学習サロン、なつかしい大勢の人にお会いできました。ありがとう、これからもよろしく願います。

浅川 文夫

◆3月6日に埼玉浮き城プロバスクラブ創立5周年記念祝賀会に参りました。設立時には八王子プロバスが色々ご相談に乗り、立派なクラブに成長されたことをお喜び申し上げます。

立川富美代

◆まだ若い若いと思っていたが3月で後期高齢者の仲間入りとなりました。若いヒケツは東京八王子プロバスクラブで諸先輩の皆さんにすばらしい知恵をいただいているからです。

荻島 靖久

◆七十数回目の誕生日を健康に恵まれ迎えられることに感謝。プロバスクラブで更に心身ともにみがきをかけたいと思います。

根本 照代

◆今日は東京大空襲の日でした。当時萩原橋の上から東の空が真っ赤に染まっていたことを思い出します。2度とあつてはならない記憶です。

高取 和郎

◆72歳、19時間のフライトに耐え45年ぶりにサハ

ラ砂漠の日の出を拝む。最高！ 野口 浩平

◆いよいよ山野草の季節。昨日老人会のメンバー10数名を引率し、裏高尾で観察会。アズマイチゲ、ヒメネコノメなどに皆感激。ビバ！スプリング。

八木 啓充

◆2月、生涯学習サロン開講おめでとうございます。我が家も上の女孫は専門校を卒業、就職も決まり、下の男孫は大学に合格してバアバとしてはホッとしています。見守っていきたいと思います。

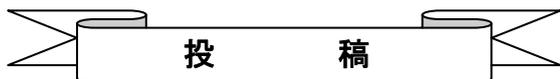
有泉 裕子

◆5歳の孫娘の「新体操発表会」を観に行きました。ファイナーレの音楽はNHKの「あさが来た」のテーマソングでした。すばらしい歌詞で2番～3番を踊る姿は感動的でした。

山形 忠顕

◆最近シニアダンディーズの活動が交流団体による刺激を与え始めたようで大変嬉しく思います。今後増々練習に励み、更に刺激の輪を広げていきたいものです。

岩嶋 寛



「始皇帝と大兵馬俑」を見て 美術鑑賞同好会

美術鑑賞会は2月15日、東京国立博物館特別展「始皇帝と大兵馬俑」を見学した。その内容は評判通りスケールの大きい素晴らしいものであった。

今から約2200年前に造られた秦の始皇帝の陵墓から、8,000体の陶製の兵士や馬などからなる兵馬俑が発掘されたことは、驚くべき20世紀最大の考古学的発見であり、世界最大の貴重な財産である。

兵馬俑は1974年(昭和49年)に発見され、その2年後に一部が東京国立博物館、京都国立博物館を巡回し、その後も日本では「中国秦、兵馬俑展」など兵馬俑の名称の展示会が6回開催され、いずれも盛況を博した。こうして我が国でも広く知れ渡りようになった兵馬俑であるが、意外にも国立博物館はこれら6回の会場には含まれていなかった。したがって兵馬俑を主題とする特別展の開催は、東京国立博物館においては今回が初めてとなる。発見後約40年の時が流れ、その間に行われた調査と研究は兵馬俑の新しい知識を絶えず私たちにもたらしてきた。同時に兵馬俑を作らせた始皇帝と秦王朝にかかわる遺跡や出土品の調査研究も大きく発展を遂げた。そ

の成果の蓄積は、周辺環境や前史などを含みより広い視野で兵馬俑を捉えようとしている。こうしたことから、



秦の建国から始皇帝の天下統一にいたる秦の歴史をたどり、あらためて兵馬俑の意味を問い直し解釈することができる。

兵馬俑は約8,000体もの兵士や馬などをかたどった陶製の像である。数の多さだけでなく、指揮官、歩兵、騎兵など異なる階級や役割を反映させた造形は、ある軍団をまるごと写したものである。兵馬俑の最大の特徴は徹底した写実表現である。基本的にほぼ等身大の大きさで、一体ずつ顔が異なるだけでなく、髪や靴裏の滑り止めといった細部まで迫真の出来栄を示す。もともと表面には肌、服など部位によって異なる彩色が施されていたが、彩色は保存が困難なため現在は剥落して残っていないものが大半である。しかし兵馬俑に見られる写実性は単なる芸術性を超えたものである。

兵馬俑はいったい何のために作られたものか。秦の帝都ないし宮城を警護する軍団のコピーとして、始皇帝が死後も夢見た永遠の世界を守る単なる軍団の役目なのであろうか。その疑問は未だ解決されていない。(宮崎浩平 記)

「駒形どぜう」を満喫

2月の美術鑑賞会のメインテーマは「兵馬俑展」でしたが、その壮大さに感動した後の「駒形どぜう」もサブテーマとして中々のものでした。実は関西にはどじょう料理というものは無く、今回は「駒形どぜう」にも興味があり参加した次第です。

当日の午後は暖かく雷門界隈の大勢の人出の中、宮崎さんが駒形屋はこっちだと迷わず先導されるのに先ず感心しました。駒形屋に着いてみると満席で外の床机でしばし待つことになりましたが、見回すと中には青い目の観光客も交じっており、店の構えは江戸情緒を感じさせるもので、料理のみならず観光名所なのだ改めて感じました。席に着くと野口

さんが“まるなべ”、“ささがき牛蒡”などと言いだして、こちらはキョトンとするだけです。他の4人も“いや、あれが良い”だの“こっちにす”だのと通ぶりを発揮するのでまたまたビックリ。



まず火桶や刻み葱が盛られた木箱が準備された後で“丸鍋どじょう”と“ささがき牛蒡”が出ました。見よう見まねでつつきながら普段は飲まないビールも添えて美味を堪能、大いに歓談しました。

このように美術鑑賞会には二つの楽しみがありますので、多くの方々のご参加をお勧めする次第です。
(馬場征彦 記)

つぶやき

3分の1の食料は捨てられている

数字が示す怖いような実態を示そう。国連食糧農業機関 (FAO) が 2011 年にまとめた報告書の数字によると、「世界の生産量の3分の1に当たる13億トンの食品が毎年捨てられている」という。

一方、満身に食べ物を口にできない飢餓人口は7億9千500万人(9人に1人)あるといわれる。

日本でも例外ではない。水産省によると売れ残り、食べ残しなどの食品ロスは12年度の推計で年642万トンにも及ぶという。つまり、国民1人当たり年間5キロを超える食料品を捨てていることになる。

(5キロ入りの米袋を捨てることを想像してみてください。)

2050年に世界の人口は90億人を突破すると予測されている。この人口増に対応するためには、今よりも1.7倍もの食料を増産する必要がある。しかし、土地や水の確保、気候変動による不作など、増産はそう簡単ではないとされる。

私達の日常の食べ物と世界の食糧問題は密接な関係があり、決して遠い国のお話しではない。日本人の持つ「もったいない」の精神を今一度噛みしめてみる必要があるのではないだろうか。

(河合和郎 記)

俳句同好会便り

私の一句〜3月の句会から

河合 和郎

桜前線も北の国まで届いている。北海道に直行の新幹線の話も賑やかである。人の動きにもわかにか活発になったように感じられる。いよいよ春本番の好季節の到来。俳句の材料も満ち溢れている。そんな句が沢山登場の句会も益々活発に。

潮来たり乗っ込み鯛へ舟走る 馬場 征彦

舟の課題句として秀。中七で決まった。産卵のため潮に乗って来る鯛の群れに走る舟。躍動感がある。

白鳥の去りし瓢湖の静寂かな 渋谷 文雄

春の気配とともに渡り鳥は北へ帰ってゆく。白鳥で賑わった瓢湖も今は静寂の中。時の移ろいを詠む。

段畑麦踏む爺の丸き背 東山 榮

麦踏とは懐かしい言葉。一昔前までは普通に見られる光景だった。作者にとって追憶の一句か。

雛の日に孫の手紙や五七調 山形 忠顕

孫にメロメロなお爺ちゃんの一句。五七調の文章の手紙とはさすが我が孫。満足そうな作者の顔。

陽のあたる窪地を知るや冬すみれ 池田ときえ

観察眼がいい。「窪地とすみれ」で佳句を仕上げる。作者の絵心とセンスが発揮された一句。高点句。

あれが白馬ストックで指す春の尾根 田中 信昭

作者が得意の山の景観を詠む。雄大な山脈を一指して、スケールの大きな句になった。

四万十の川面に春や舟下り 飯田富美子

ゆったりと流れる四万十の川下り。川面を吹く風に春の優しさを感じながらの長閑な旅路。

春の風ゆるりと下る屋形船 立川富美代

今日の最高点句の一つ。春らしい雰囲気がよく出ている。どこぞの旅空か。詮索は野暮というもの。

きらり跳ぶ試練の小滝上り鮎 河合 和郎

海で育った稚魚は生まれた川の上流を目指す。遡上を阻む小滝を跳び越える姿は美しくも健気。

編集後記：このところ毎号のように新しい会員のご紹介が続き、春風が吹くようなうれしさを感じます。プロバスサロンも始まりました。充実の会員活動の一端がお伝えできれば幸いです。 編集担当 池田ときえ